

シャルダンの描いた男性たち

野 口 榮 子

はじめに

ジャン・バティスト・シメオン・シャルダン (Jean-Baptiste Simeon Chardin 1699～1779)^①は、フランス十八世紀の絵画史において、静物画や動物画の画家として知られている。また人物画においても、「食前の祈り」や、当時の家庭生活を中心とした若い母親の子供たちにたいするやさしい心づかいなどが、優れた場面として、十八世紀を代表する作品の中に数えられている。またシャルダンの描いた人物画は、女性像が多く、男性はその数が少い。しかし男性を描いた作品は、女性のテーマと重なりながら、シャルダンの様式展開の中で、重要な役割を果たしていると思われる。この小論では、シャルダンの描いた男性をテーマとする作品を取りあげ、その点について考察したい。それはシャルダンの女性たちを中心とする人物像や風俗画の展開と意味づけに、裏面から光をあて、同時にシャルダンの絵画の全貌を解明する手がかりになると考えられるからである。そのために、まず、初期から晩年に至るシャルダンの制作年代の中で、男性たちの主題をとりあげ、その経過と位置づけをおこない、代表的な作品の四点(カラー図版)を中心に考察を加えたい。

シャルダンの制作年代は、シャルダンの全作品のカタログを出版しているローゼンバークによって、次のように区分されている。ここで取り扱うシャルダンの描いた「男性たち」は、どのような年代において登場するのであろうか。ローゼンバークの区分に従って考察したい⁽²⁾。

(1) 静物画の第一期（一七二四年～一七二八年）。シャルダンの二十五才から二十九才までに当たる。一六九九年十一月二日に、パリのセーヌ通りに誕生し、サン・シュルピス教会で洗礼を受けたシャルダンは、指物師であった父親の許で成長した。ピエール・ジャック・カズー (Pierre-Jaques Cazes 1676～1754) のアトリエで学んだ後に、ノエル・ニコラ・コフペル (Noël-Nicolas Coyvel 1690～1734) の仕事を手伝った。静物画の第一期といふこの時期は、一七二四年に、シャルダンが、サン・リュックのアカデミーに入会し、一七二八年には、ドーフィーヌ広場の青年画家たちの展覧会に「鱒(えい)」(現在はルーヴル美術館蔵) その他の作品を出品した時期である。また同じ一七二八年九月には、王立絵画・彫刻アカデミーが、シャルダンの「動物と果物を描く才能により」、会員になることを認めている。つまりシャルダンの画壇への出発点であり、作品としては、動物画、静物画が中心である。「鱒」を含む台所の一隅や、犬のいる「パーティの飾付け」、伝統的な「画家に見立てた猿」、猫、獲物としての兎や鳥などが描かれ、彼の力量が発揮されはじめた時期といえる。人物はまだみられない。しかしサン・リュックのアカデミーに入会した頃に描いたと思われる、現在はパリのカルナヴァレ美術館所蔵の「ビリヤードに興じる人々」(35×82.5 cm) という横長の油彩画には、中央の玉突き台をかこんで、二十三人の男性が小さく描かれている。その後シャルダンは、このような集団的な人物を描いていないので、ここではそのことについて指摘するにとどめたい⁽³⁾。いずれにし



図1 シャルダン：居酒屋で働く若い男，1735年，油彩，46×37.2 cm，グラスゴー大学ハンテリアン・アートギャラリー蔵



図2 シャルダン：素描する青年，1737年，油彩，80×65 cm，ルーヴル美術館蔵

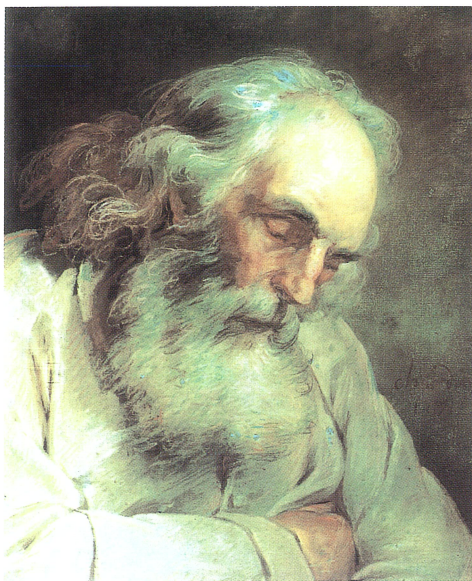


図3 シャルダン：老人の胸像，
1771年，パステル，45×37
cm，アメリカ・J. ホルヴィ
ッツコレクション蔵



図4 シャルダン：日除け帽の自
画像，1775年，パステル，
46×38 cm，ルーヴル美術
館蔵

でも、個人的な単独の男性人物像は、現存のシャルダンのリストの中には、この時期には登場しないのである。

(2) 中間期（一七二八年～一七三三年）。シャルダンの二十九才から三十四才までに当たる。一七二三年以来の婚約者であったマルグリット・サンタール (Marguerite Saintard) と、一七三一年一月二十六日に結婚した。仕事の上では、狩の獲物の動物や鳥、台所の一隅に置かれた食器類と獲物などの作品がつづく。またジャン・バティスト・ヴァンロー (Jean Baptiste Vanloo 1681～1746) とともに、フォンテーヌブロー宮殿のフランソワ一世のギャラリーの修理の仕事をしている。シャルダンと妻との間には、結婚した年の十一月に長男が誕生した。二年後には長女が生まれたが、早世したと思われる。この時期にも人物画は描かれていない。

(3) 風俗画の第一期（一七三三年～一七四〇年）。シャルダンの三十四才から四十一才に当たる。一七三五年四月には、妻の死があるが、この頃から「手紙に封をする女性」や「水を汲む女性」「シャボン玉をつくる男の子と洗濯する女性」など、台所で働く女性たちの風俗画が描かれはじめる。「手紙に封をする女性」には、男性の代書人が登場するが、さらに「うしろ姿の画学生」、「シャボン玉を吹く男性」、「ジョゼフ・アヴェドの肖像画」など、たてつづけに男性が描かれる。一七三七年からは、王立絵画、彫刻アカデミーの主催する「サロン展」に出品するようになる。男性の単独の上半身像が多くなるのは、この時期からといってよいであろう。

(4) 「食前の祈り」の成功から静物画への時期（一七四〇年～一七五一年）。シャルダンの四十一才から五十二才までである。この時期は、シャルダンにとって、一七四三年の母親の死、一七四四年の再婚の出来事がある。シャルダンは、一七四四年十一月一日に、フランソワーズ・マルグリット・プージェ (Françoise-Marguerite Pouget 1707～1791) と再婚している。仕事の上では、ひきつづき、「食前の祈り」を含む風俗画が多数を占め、サロンにおける評判も良好であった。男性の上半身像は、ひきつづいて描かれている。さらに再び狩の獲物と組み合わせた台所の日用道具のような静物画も描かれはじめていた。

(5) 静物画の第二期（一七五一年～一七六四年）。シャルダンの五十二才から六十五才までの期間である。十八世紀フランスの啓蒙哲学者であるデイドロ（Denis Diderot 1713～1784）によるサロン展の批評が、一七五九年からはじまり、シャルダンの静物画にたいするデイドロの高い評価がおこなわれた時期でもある。因に、デイドロは、一七五九年、一七六一年、一七六三年、一七六五年、一七六七年、一七六九年、一七七一年、一七七五年の八回の「サロン批評」で、シャルダンの作品を批評しているので、その間に、十六年の経過がみられる。そして常に最高の賛辞を惜しまないデイドロの姿勢を読むことができるのである。デイドロの批評は、シャルダンの最晩年に及ぶ。しかしこの小論で取り扱う男性の描写は、その期間には極めてすくない。デイドロは、シャルダンの男性表現の画面を取り扱わなかったのではなく、たまたま少なくなつた時期にサロンの批評をはじめたことになるのである。

(6) 裝飾的大画面とグリザイユ（灰色の濃淡で立体感を出す手法）によるだまし絵の時期（一七六四年～一七七一年）。シャルダンの六十五才から七十二才までの期間である。この期間にシャルダンは、国王の所有しているシヨワジー城や、ロシアのエカテリーナ二世（Catherine II la Grande 1729～62～96）の注文で、扉の上部の裝飾を描いた。「美術」や「音楽」、「科学」の表示物がそれである。「だまし絵」は、浮彫のような立体感のある描写法を用いて描く手法である。これらの諸作品の描かれた時期を、ローゼンバークは、ひとつの期間としてまとめた。またこの年代は、シャルダンにとって大きな事件の起きた時でもある。それは、シャルダンの長男のジャン・ピエールが、ローマ賞を得て、ヴェネツィアに留学したが、一七六七年六月二十六日にヴェネツィアに到着すると、姿が見えなくなり、自殺と考えられたことである。すでに六十八才であつたシャルダンにとっては、きわめて不幸な重大な出来事であつたといわなければならない。

(7) バステル画の時期（一七七一年～一七七九年）。シャルダンの最晩年で、七十二才から没年の八十才までである。この最後の八年間に、画家は結石と水腫に悩まされ、十二月六日に、宿舍として与えられていたルーヴル宮殿の

中の住居で亡くなった。この期間は、ほとんどパステル画で、肖像画やだまし絵を描いている。肖像画は、自画像やシャルダン夫人、画家のバシユリエ (J.-J. Bachezier 1724-1806) などがある。

ローゼンバークにしたがって、シャルダンの制作年代をたどり、ここで問題にする男性たちの像の分布状態を検討した。それらは、(3)風俗画の第一期(一七三三年-一七四〇年)。(4)「食前の祈り」の成功から静物画への時期(一七四〇年-一七五一年)。(7)パステル画の時期(一七七一年-一七七九年)に限定される。もちろんローゼンバークのカタログに記載された以外の作品も存在したであろう。また記録にのこっていない注文による肖像画もあったかもしれない。しかし注文による作品は、何かの記述がそれを証明するので、ここではローゼンバークのカタログと制作年代を中心に、次の問題の考察に移りたい。

一一

シャルダンの動物や果物による絵画の成功は、やがて伝統的な画家に見立てた猿や、猿の骨董屋の画面を生みだした。しかし風俗画的な人物像は、一七三三年頃からで、最初の妻がモデルになったと思われるものが多い。台所で水を汲んだり、シャボン玉を吹いている幼い子供を傍らに腰かけさせて、洗濯をする女性など、結婚後のシャルダンの生活を彷彿とさせる作品が多い。つまりシャルダンは、画家としての彼の制作年代の出発点には描くことがなかった人物画⁽⁴⁾を、結婚後に妻の日常生活に眼をとめることよって描きはじめてたのである。男性像がすくないのは、そのようなところに由来すると考えることができる。

妻の日常生活の情景から出発した風俗画は、やがて二・三年で、妻の死という予期しない出来事に直面する。そして、妻の死の年に、初期の男性をテーマにした「居酒屋で働く若い男」(図一)が登場するのである。それも「鍋を

みがく女」と一対になるような構図である。両者は、寸法がほとんど同一で、現在も同一の所蔵に帰しているが、後者のほうが二・三年後に描かれている。どちらも、大きな桶の前で仕事をしている。男性は壺を柄のついた刷毛で洗っており、足もとには同様の大きさの壺が置かれている。居酒屋のワインを入れる壺であろう。男の向かって右には、漏斗を立てたやや小さい瓶と、赤色の手付の容器がある。男は、ターバン状の帽子を被り、袴つきの白い上衣の上から、白い大きな前掛けをしている。右の腰には、薄水色のリボンからやや大きな鍵が下がっている。彼がこの店のワイン庫を自由に開閉できる立場ということを示すものである。彼の顔面の前の壁には、ワインの置場のナンバーを示す表示であろうか、小さな板が掛かっている。男は前を向き、画家の視線の前で、いかにも緊張したような表情である。しかし働いている人として、好感のもてる姿勢である。シャルダンの描く人物は、固いとか動きがすくないとしばしば指摘される。たしかにシャルダンの得意とした静物画——果物や獲物の鳥や兎、壺、桶などのように、人物も静かに動作を止めている。そのことは、シャルダンの制作過程の途上では、厳しく批難されるよりも、当然の経過として、認められるべきことであろう。しかも女性を中心に描きすすめてきたシャルダンが、妻の死に直面して、このような働く男性を、彼の得意とする台所用品の中で描いたことは、画家の沈黙のメッセージを示すものと考えられる。この作品と一対をなすと思われる「鍋をみがく女」は、同じように白色の小さな帽子を被り、白い上衣と白いスカートで、少しピンクがかった大きな前掛けをし、「居酒屋で働く若い男」と同じ色のリボンに鍵を付けて、首から下げている。そして「居酒屋で働く若い男」と向かいあうように画面の左を向いている。働く動作を同じようにする若い男と一対の構図で、妻の死後、シャルダンは女性を描きつづけたのである。 「居酒屋で働く若い男」と同じように、腰からリボンで鉢と針山を下げて、お針子さんであることを示している「羽根つきをする娘」（一七三七年、油彩、パリ、個人蔵）の顔には、影がついている。しかし一七三八年の「買物帰りの女」（46×37 cm、油彩、オタワ、カナダ・ナシヨナルギャラリー蔵）の女性の顔の表情は、落ちついて明るくなる。「居酒屋で働く若い男」

以外に、男性の働くテーマは現存の作品にはみられない。その後の女性や子供たちや、家庭の情景の中には、男性は全く登場しない。現在は失われてしまった「聖書を読みかせる家庭の父」というシャルダンの作品があったようであるから、皆無ではなかったであろう。しかしシャルダンは、聖書を読みかせるというような役割以外で、家庭の団欒の中に身を置くことは、妻の死後かなりの抵抗があったのかもしれない。「うしろ姿の画学生」「素描の情景」などには、男性が描かれているが、それらは、「居酒屋で働く若い男」のような役割はしない。「居酒屋で働く若い男」は、シャルダンの人物像の展開の中で、重要な意味をもつと考えられるのである。

三

シャルダンにとって、男性を描く重要な場面として、肖像画がある。女性の肖像画は、晩年の「シャルダン夫人」(46×38.5 cm、一七七五年、バステル、ルーヴル美術館素描室蔵)や現存しない作品など、その数はきわめて少ない。男性の場合も、固有名詞のほかに、「画家ジョゼフ・アヴェドの肖像またはプロンプター」(138×105 cm、油彩、一七三四年、ルーヴル美術館蔵)、「シャルル・テオドーズ・ゴッドフロワの肖像またはヴィオロンを手にする若い男」(67.5×74.5 cm、油彩、ルーヴル美術館蔵)というように、もうひとつの題名をもっている。このことは、ローゼンバークによれば、例えば、一七三七年に、この「ジョゼフ・アヴェド」の作品がサロン展に出品された時は、「仕事場の中の化学者」であり、一七四四年には、「プロンプター」となり、一七五三年には、「読書する哲学者」となっていた。しかし一七五三年のサロンの熱心な解説者によって、この作品は、シャルダンの友人の画家ジョゼフ・アヴェドの肖像画だとされたと説明されている。実際にサロン展のカタログ⁶⁾には、一七五三年の六〇番に、シャルダンの「読書する哲学者」の記録がみられる。シャルダンは、当時も充分にその存在理由をもつ「公式の」肖像画家

としては、認められていなかったもので、風俗画的な題名で出品したのであるというフランカステルのような意見も尤もである。しかし一七五七年のサロン展のカタログの三七番には、シャルダンの「外科の教授・王立検閲官ルイ氏の楕円形の肖像画」が出品されている。アヴェドの肖像画において、実名が明白になったことで、肖像画としての題名を表面に出したのであろうか。しかしそのようなことは、シャルダンの本質にとつては、それほど重要でないと言ふことが出来る。結局は、そこに描かれてモデルとなつている人物を、シャルダンがいかに描いているかに焦点を当てなければならぬ。

「素描する青年」(図2)は、上半身像で、一七三七年に、つまりシャルダンが、「居酒屋で働く若い男」以降に、女性像を描きつづけた時期と同じ頃に描いたルーヴル美術館の至宝のひとつである。同様の画面がベルリンにもある。また当然のことではあるが、固有名詞のもとで呼んでよい人物がモデルと考えられる。しかし固有名詞が判然としなくても、この画面は、充分に肖像画として認められてよい風格をもつている。ただ顔がやや斜めに向いて、フランカステルのいういわゆる「公式の」肖像画としての期待には添えないかもしれない。事実、シャルダンの上半身の人物画は、ほとんど斜めもしくは横向きの顔で描かれている。この素描する青年は、作品を前にして、左手に白いチョークをはさんだチョークばさみを持って、右手のナイフで、その先端を尖らせようとしている。白いチョークは、素描にハイライトを付けるために用いられるので、この青年は、作品の仕上げにかゝつているところであろう。真剣なまなざしと青年らしい真摯さが伝わり、この人物のさわやかな人格に觸れる思いがする。肖像画として通用する男性の上半身像の同列線上にあるシャルダンの男性像のひとつである。他にもトランプを机上に立てている男性が何点かみられる。「独楽を回す少年」には、固有名詞も伝えられている。男性をモデルにし、固有名詞を明白にしてよいシャルダンの一分野として特徴づけたと思う。

四

肖像画と名づけてもよいシャルダンの上半身の男性像は、シャルダンの制作年代の第五期・第六期には、ほとんど描かれず、再び人物像が登場するのは、最晩年の八年間においてである。老年に伴う身体上の理由から、描くための労力をそれほど用いなくてよいパステル画を選んだシャルダンには、この期間に多くの肖像画を描いている。作品のほとんどすべてが、顔を中心とする肖像画である。しかも顔は、やや斜めもあるが、以前の人物画よりも、しっかりと正面を向き、それぞれの風貌の特色が、きわめて適確に表現されている。フランカステルによれば、一七七一年のサロン展においても、これらの肖像画は「頭部の習作」としてカタログに載っていると指摘され、事実その通りである。シャルダンは、おそらくパステル画の技法をこの期間にマスターし、不自由な身体の中で、新しい境地を開いた。「日除け帽の自画像」(図4)は、七十六才でまだ力強さのこっているシャルダンが、巧みな手法で自画像の中に、自己の生涯をかけてつくりだした風貌を留めたのであろう。

しかしこの「日除け帽の自画像」は、「老人の胸像」(図3)のような表現法を経て、つくりあげられたものであることに注目したい。「老人の胸像」は、これもまた固有名詞を表面に出したい画面である。ゴンクール兄弟は⁷⁾、このパステル画を「色調の激しい対比」とし、ケリーユ⁸⁾は、「レンブラントと類似している点」について述べている。しかしわれわれは、この「老人の胸像」において、シャルダンが、パステルという素材の中から、幾多の試行錯誤を経て、独自の手法を獲得しようとした一面を見出すことができる。「色彩画家」と称されたシャルダンは、パステルの描く細い線を究極まで追求し、レンブラントというよりも、印象派の画家たちの目指したような側面を追求し、「日除け帽の自画像」にみる完成度に達したといってもよいであらう。

おわりに

シャルダンの生涯にわたる画業の中で、男性をテーマとした作品の制作年代を検討し、それぞれの期間におけるシャルダンの作品や、個人生活との関係の中で、意味を探り、問題を考察した。それは単に主題が異なるというだけでなく、創作の主要な原典として、人物像全体に及ぶ問題を内包し、さらには女性像との関連で把握することができる。とくに晩年のバステル画においては、絵画のもつ表現の問題の中心となる技法や方式を、シャルダンが晩年に至っても新しく熱心に追求していたことを示すものであり、彼の芸術の頂点を飾るものと考えることができる。これらの点を土台に、さらに彼の女性像を中心とする人物表現の問題に進みたいと思う。

注

- (1) 最近の研究者たちは、ジャン・シメオン・シャルダン (Jean Simeon Chardin) とする事例が多い。この問題については、別に考察したい。
- (2) 参考文献 1、2 による
- (3) このような集団的人物の画面は、シャルダンの修業時代に描かれ、その後は「果物と動物の才能」を認められ、注文を受ける機会もすくなく、描くチャンスがなかったと思われる。
- (4) すでに述べた集団人物画や、修行中の習作には、人物を描いている。
- (5) 参考文献 3 による
- (6) 参考文献 6 による
- (7) 参考文献 4 による
- (8) 参考文献 5 による

参考文献

- 1 P. Rosenberg : Chardin, exh. cat. Paris, Editions de Réunion des Musées Nationaux, 1979.
- 2 P. Rosenberg : Tout l'oeuvre peint de Chardin, Flammarion, 1983.
- 3 H. W. Janson : Catalogues of the Paris Salon 1673 to 1881, Garland Publishing, Inc. New York & London, 1977.
- 4 E. et J. de Goncourt : Chardin, Gazette des Beaux-Arts, février, 1864, t. XVI.
- 5 J. Caillieux : Les artistes français du XVIII siècle et Rembrandt, Etudes d'Art français offertes Ch. Sterling, Paris, 1975.
- 6 G. et P. Francastel : Le portrait, 50 siècles d'humanisme en peinture, Librairie Hachette, 1969.
(天羽 均訳 人物画論、白水社 1987)
- 7 P. Conisbee : La vie et l'oeuvre de Jean-Siméon Chardin, Art-Création-Realisation, 1985.
- 8 M. R. Michel : Chardin, Hazan, 1994.
- 9 G. Naughton : Chardin, Phaidon Colour Library, 1996.

——文学部教授——